数式処理 *Bulletin of JSSAC (2011)*
Vol. 17, No. 2, pp. 1 - 1

巻頭言

東日本大震災について

濱田龍義

福岡大学理学部/JST CREST

東日本大震災で被害を受けた方々に謹んでお見舞い申し上げます．巨大地震と津波の被害，それに続く原子力発電所の事故など，日本全体がたいへんな困難に直面しています．

震災から 2ヶ月後の 2011 年 5 月に仙台近郊にある大学の研究室を訪ねました．仙台駅は応急処置による修繕が終わり，東北各県からの出店も多く，大勢の人で賑わっていました．震災から 2ヶ月が経ち，市内の商店街も普段どおりの様子に見えます．実際，地元の人に聞くと，市内の建物については，これまでの地震の教訓が生きており，被害を抑えることができたとのことでした．

多賀城のキャンパスを訪ね，打ち合わせを行った後，先方の要望もあり，震災で被害を受けた沿岸部の様子を案内していただきました．多賀城駅から 1km ほど南に末の松山という場所があります。古今和歌集に「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪をこえなむ」と詠まれた場所ですが，今回の震災では、この末の松山の近くまで波が来たのだそうです。ただ、末の松山だけは波を越えなかったそうで、危機管理のための口伝であったのかもしれません。その後，海沿いに仙台市に向かって車を走らせて目に写った沿岸部の惨状は本当にひどいものでした．かなり片付けられたとは思いますが、道路脇の林には、横転したり潰された車が散在し、高さ 10m 以上の木が根こそぎ引き抜かれて転がっていました。

今回の震災と津波は，我々の想像を越える自然の力を見せつけましたが，産総研の活断層・地震研究センターによって公表されている貞観地震についてのレポートなどを読むと，巨大津波に対して真剣に「備え」を呼びかけていたことがわかります．残念なことに，このレポートの存在は，震災後に注目を浴びることになりましたが，研究分野は違えど，地道に研究に取り組み，粘り強く社会に訴えていた姿勢には大いに見習うべきものがあります．今回の訪問によって，我々が，どのような形で情報を発信しつづけていくか，また，どのような形で社会貢献できるかということについて，深く考えさせられました．今後，数式処理という複合領域において，粘り強く研究に取り組み，次の世代に対して新たな発展を期待できるような何かを残せればと願っています．

© 2011 Japan Society for Symbolic and Algebraic Computation